

特集●荒川流域を知る (2)

【荒川放水路が「荒川」となって】

江戸時代、年貢米や産品を江戸へ運ぶ水運が優先された。江戸は水の都で栄えたが、それと引き替えに、低地に生きた庶民は洪水に苦しんだ。

川を制する治水が始まったのは、日本の技術者が科学を手にした明治も中期になってから。荒川でも放水路を開削し、水門を築き、利根川水系の諸河川とは交わらせることなくそれぞれ直線化させて海へ向かわせた。

今東京は、低地が海原になるような洪水から守られている。荒川放水路も正式の「荒川」となった。しかしそれと引き替えに、放水路の意味を忘れ、水の脅威も、自然の営みも、それを制する人の苦闘も、私たちの記憶から消えていった。

【D 田んぼ日誌から】

2002年9月22日(日)、D 田んぼ収穫の日を迎えた。天気は残念ながら曇り。朝八時全員集合。取りきれなかったノビエの穂の刈り取り、雀除けの糸はずし、コンバインの回転スペースのための枕地(四隅畝二条分)の手刈り、雀除けの支柱を利用した稲架づくりなど、刈り入れの準備は前日中にすませておいた。コンバイン到着を待つ整然とした田も、今日の稲刈りを厳粛に待ち受けているように見える。

メンバーの榎田さんが運転する二条刈りコンバインが二時間かけて斜面林の坂の向こうに姿を現した。みんなの顔に笑みがこぼれている。「さあ、刈り入れた」、一人一人の胸の内の歓声が伝わってくる。